原　著

聖徳栄養短期大学紀要 No.36　(2005)

スローフード運動と若者の受容認識

伊澤正利、中尾祥子、吉田真知子、富岡　孝

Acceptance recognition of the young man on the slow food movement

MASATOSHI IZAWA, SHOKO NAKAO, MACHIKO YOSHIDA and TAKASHI TOMIOKA

It investigated for 257 junior college students on weekdays late in November, 2005, and it divided into two groups of those who know slow food movement, and those (language is not known to contents, even if it knows) who do not know, and compared with them.

The difference with both big groups was not seen in the frequency of the dish cooked in the degree of satisfaction of everyday eating habits, and a house, a daily meal, and the use situation of a fast food restaurant.

The acceptance recognition about slow food thought had much those who express a view with the more nearly affirmative group (group Ⅰ) known compared with the group (group Ⅱ) which does not know slow food movement, and the necessity of promoting a slow food movement was suggested.

緒言

スローフード運動は、1986年イタリア北部の町ブラで生まれた食の革命運動であり[1]、この運動が世界へ波及して20年になろうとしている。奇しくも20年という節目の年に発祥の地ブラの近郊、トリノで冬期オリンピックが開催される予定であり、スローフード運動もこれに併せて盛り上がることを期待している。

スローフードの思想には、自国の伝統的な食生活を守ることが根幹にあり、ただ単にファストフードの凌駕傾向に警鐘を発するにとどまらず、伝統的な食生活を支える支援（地産地消）、味覚の教育を含めた総合的な学習（食育）、農業景観を生かした観光（産業と環境の一体化）などを統合推進する考え方であって、この事業を具体的に進める民間NPOスローフード協会の活動が世界各地で展開されている。わが国でも、ニッポン東京スローフード協会が2001年に設立されるなど各地にもスローフード協会のコンヴィヴィウム（支部）がある。いずれも、食のよろこびと居心地のよいスローな社会

Keywords: slow food, fast food, acceptance recognition, the young man

を考えていくという方針のもとに活動している[2]。

しかし、わが国では、これまでに大量生産・大量消費社会を形成し、その流通過程の変化がもたらす食資源の大量廃棄にも平然とかまえる一方、食の外部化・簡便化と過剰摂取とが相まってもたらす生活習慣病におびえている。さらにはBSE、鳥インフルエンザ、食品の偽装など食の安全をおびやかす実態にも直面し、ファストフード社会が抱える食の周辺をみると多様な問題が顕在化している[3]。そうした中で、近年、経済効率優先のファストフード社会の食生活を見直す国策（食生活指針：平成12年、食育基本法：平成17年）が制定された。これらの内容をみるとスローフード思想と重複する点が多々見受けられる。

食事を評価する時、ファストフードは悪でスローフードは善という短絡的な判断を下すのは誤りで、ファストフードにも相応の利点があり[4]、両者の優れた部面を上手に合わせ持つ食生活が望ましい。したがって、スローフードの思想に共鳴し、それを実践することができればファストフードの行き過ぎに歯止めがかかり、日本型食生活指針の目標へと導く有効な手段[5]の１つと考えられる。しかし、過剰なまでに浸透したファストフード傾向の是正は容易なことではない。そこで、筆者らはファストフードに頼る傾向が強いと思惟される若い世代にスポットをあて、スローフード思想に対する認識および食生活の現状について質問紙調査を実施し、スローフード運動の意義について検討した。

対象及び方法

１．調査対象・時期

本学食物栄養学科2年（短大）の学生（19～25歳）257名を対象とし、2005年11月下旬の１週間のうち、平日の授業日を調査日とし、スローフード、食生活に関する調査を

表１　アンケート調査項目

食生活に関する項目

現在の食生活に満足していますか、それとも不満が多いですか
家庭の食事は家で作る手料理の場合が多いですか
朝食は簡単に済ますことが多いですか
昼食は簡単に済ますことが多いですか
夕食は簡単に済ますことが多いですか
間食・夜食は簡単に済ますことが多いですか
ハンバーガー店やコンビニ店などファストフード店の利用状況はどうですか
ほぼ毎日利用する人はいつファストフード店を利用しますか

スローフードに関する項目

コンビニ店などでは、売れ残った弁当やパンを処分することについてどう感じますか
日本は、食糧自給率が低く外国に依存していますが将来の食生活に不安はありますか
日本の農業や水産業は消費者のニーズに応えた質の高い食糧を供給していると思いますか
伝統的な野菜や地物のブランド品などを供給する生産者の育成や支援が必要だと思いますか
地域で産した高品質の食材を用いて、家庭で調理してゆっくり味わいたいと思いますか
「お袋の味」と称する家庭の伝統料理は大切だと思いますか
家庭で料理に用いた食材の産地や味、食べ方などが話題になることがありますか
食事の作法やこどもの味覚教育を含めたしつけは必要だと思いますか
スローフードという言葉を聞いたことがありますか
スローフード運動が日本でも展開されていますが、スローフード協会やその内容について知りたいと思いますか

表２　対象の内訳

スローフードという言葉を聞いたことがありますか

１．聞いたことがあり内容も知っている	129名	(52.9%)	⇒	Ⅰ群
２．聞いたことはあるが内容は知らない	95名	(38.9%)	⇒	Ⅱ群
３．聞いたことがない	20名	(8.2%)	⇒	Ⅱ群

１．を　Ⅰ群　⇒　129名（52.9%）

２．３．を　Ⅱ群　⇒　115名（47.1%）に分類した

質問紙により実施した（表１）。

調査用紙への記入の不備な者13名を除外し、244名（有効回収率94.9%）を分析対象とした。

２．調査成績の分析

調査成績は、Microsoft社の表計算ソフトExcelにデータを入力し、Excel統計2002によって集計を行い、χ^2検定、相関などの分析手法を用いた。

結果

１．対象者の分類

スローフードに関する質問のうち、「スローフード運動を聞いたことがあり、内容も知っている」と答えた129名（52.9%）をスローフード運動を知っている群（Ⅰ群）、「スローフード運動を聞いたことがあるが、内容は知らない」と答えた95名（38.9%）と「スローフード運動を聞いたことがなく、内容も知らない」と答えた20名（8.2%）を併せ（115名、47.1%）、スローフード運動を知らない群（Ⅱ群）との２つに分類した（表２）。

２．食生活に関する調査成績

食生活に関する質問項目に対する結果を以下に示す。

１）現在の食生活の満足度

現在の食生活に関して「ほぼ満足している」のはⅠ群（31.0%）、Ⅱ群（27.8%）とも3割程度で、約7割の学生が現在の食生活に不満を抱いていた。特に「食事のバランスが悪く不満」と回答したのはⅠ群で38.0%、Ⅱ群で47.0%いた（図1）。

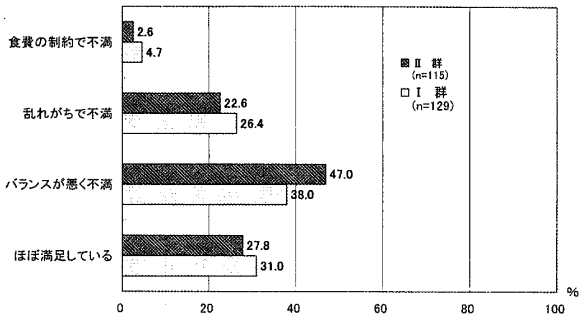

図１　現在の食生活の満足度

２）家庭で作る手料理の頻度

家庭で作る手料理が「多い方」と答えたのがⅠ群・Ⅱ群とも６割以上で、「少ない方」はそれぞれ1割強であった（図２）。

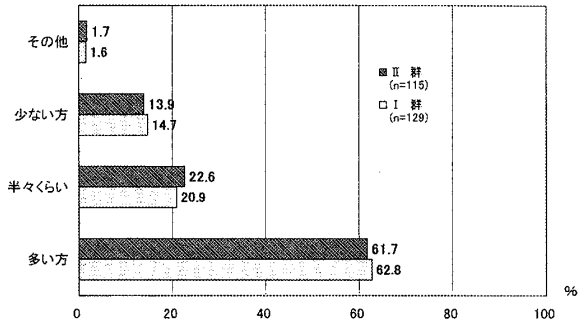

図２　家庭での食事の手作りの頻度

３）毎日の食事を簡単に済ます方か

毎日の食事に対し、「朝食」「昼食」「夕食」「間食」のそれぞれについて、簡単に済ますことが多いかどうかの結果をみると「朝食を簡単に済ます」がⅠ群で77.5%、Ⅱ群で72.2%とどちらも７割強が簡単に済ますと答え、「昼食」においてもⅠ群で66.7%、Ⅱ群で61.7%と同様の傾向を示した。「夕食」を簡単に済ますのはⅠ群で18.6%、Ⅱ群は28.7%で10%の差がみられた。また、「間食」においても「簡単に済ます」、「間食は食べない」で両群の間には約10%の差があった（図3）。

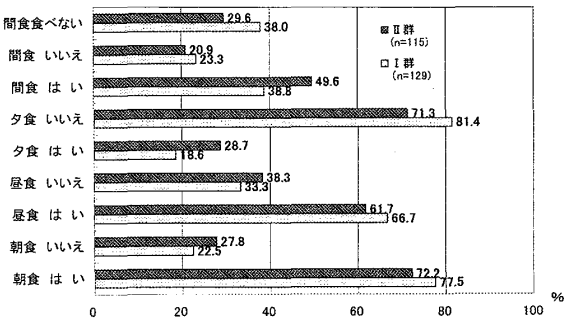

図3　毎日の食事は簡単に済ます方か

4）コンビニ店やファストフード店の利用状況

コンビニ店やファストフード店を「ほぼ毎日利用する」のはⅠ群で28.7%、Ⅱ群は33.9%であり、「ときどき利用する」ではⅠ群が58.1%、Ⅱ群は53.9%で、若干の差はみられるもののそれぞれ「毎日」「ときどき」併せて約9割が利用している。彦坂ら[6]の報告では、「よく利用する」が10%程度であるのに比べ、それに該当する本対象者の利用頻度は約30%であり、それよりやや高い傾向にあった（図4）。

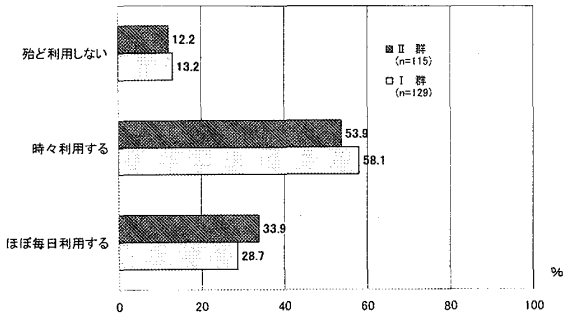

図4　コンビニ店やファストフード店の利用状況

なお、1）～4）までについてχ^2検定を行ったが、「スローフード運動を知っている群（Ⅰ群）」と「知らない群（Ⅱ群）」の間には統計的な有意差は認められなかった。

3．スローフードに関する調査成績

スローフードに関連する質問に対する結果を以下に示す。

1）コンビニ店などで売れ残った弁当や調理パンなどを廃棄処分することについて

「大変もったいない」と答えたのはⅠ群（82.2%）、Ⅱ群（80.9%）とどちらも8割ほどいた。また、「商売だからやむを得ない」というのも両群とも約1割いた（表3）。

表3　コンビニで処分する弁当やパンについてどう感じるか

	Ⅰ群 (n=129)	Ⅱ群 (n=115)
考えたことがない	2.3 %	6.1 %
大変もったいないと思う	82.2	80.9
商売だからやむを得ない	13.2	13.0
その他	2.3	0.0

2）日本は食糧自給率が低く外国に依存している状況について

将来の食生活を「少し心配している」者がⅠ・Ⅱ群とも約6割、「大変不安に思っている」者もそれぞれ2割おり、自給率の低下による将来の食生活に不安を持っている（表4）。

表4　食糧自給率が低く外国に依存しているが将来の食生活に不安があるか

	Ⅰ群 (n=129)	Ⅱ群 (n=115)
考えたことがない	6.2 %	8.7 %
安定しているので不安はない	10.1	11.3
少し心配している	63.6	61.7
大変不安に思っている	20.2	18.3

3）日本の農業や水産業は消費者のニーズに応えた質の高い食糧を供給していることについて

「質の高い食糧を供給している」と思っている者はⅠ群で17.8%、Ⅱ群は16.5%であった。「食品によっては応えている」と思っているのはⅠ群で72.1%、Ⅱ群では71.3%と7割強を占め、生産者は概して消費者のニーズに応えた質の高い食品を提供しているとの認識がみられた（表5）。

表5　日本の農業や水産業は消費者のニーズに応えた質の高い食糧を供給しているか

	Ⅰ群 (n=129)	Ⅱ群 (n=115)
していると思う	17.8 %	16.5 %
しているとは思わない	9.3	10.4
食品によっては応えている	72.1	71.3
その他	0.8	1.7

4）伝統的な野菜や地もののブランド品など

を供給する生産者の育成や支援について「必要だ」と思うのはⅠ群で58.1%、Ⅱ群で47.0%であった。「どちらでもよい」と答えたのはⅠ群で34.1%、Ⅱ群では45.2%で、統計的には有意ではなかったが、両群の間には10%の違いがみられた（表6）。

表6　伝統的な野菜や地もののブランド品などを供給する生産者の育成や支援は必要だと思うか

	Ⅰ群（n=129）	Ⅱ群（n=115）
必要であると思う	58.1 %	47.0 %
どちらでもよい	34.1	45.2
価格が高くなるので必要ない	6.2	5.2
その他	1.6	2.6

5）地域で産した高品質の食材の利用について

Ⅰ群は「多いに利用している」のが34.1%、Ⅱ群では27.0%であり、「ときどき利用する」でもⅠ群の方が多い傾向を示した（表7）。

表7　地域で産した高品質の食材を利用することはあるか

	Ⅰ群（n=129）	Ⅱ群（n=115）
多いに利用している	34.1 %	27.0 %
ときどき利用する	52.7	50.4
関心がない	7.8	11.3
飲食店でなら利用すべき	5.4	11.3

6）家庭の伝統料理について

「大切なので残しておくべき」と答えたのは、Ⅰ・Ⅱ群とも9割以上にものぼり、大半が「家庭の伝統料理」を残しておくべきだと思っている（表8）。

表8　家庭の伝統料理は大切と思うか

	Ⅰ群（n=129）	Ⅱ群（n=115）
自分には存在しない	1.6 %	0.9 %
大切なので残しておくべき	94.6	93.9
現在ではあってもなくてもよい	3.9	5.2

7）家庭で料理に用いた食材の産地や味、食べ方について

「話題になることはない」のは、Ⅰ群で32.6%、Ⅱ群で41.7%と差がみられ、「よく家族の話題になる」では両者間に差はみられなかったが、「産地直送のものが送られてきた時に話題になる」ではⅠ群の方が多かった（表9）。

表9　家庭では料理に用いた食材の産地や味、食べ方について話題になることがあるか

	Ⅰ群（n=129）	Ⅱ群（n=115）
話題になることはない	32.6 %	41.7 %
よく家族の話題にのぼる	33.3	30.4
産地直送のものが送られてきた時のみ	34.1	27.0
その他	0	0.9

8）食事の作法や子供の味覚教育を含めたしつけについて

「大切なので今日でも必要」と思っている者が両群とも9割以上に達し、「しつけ」は必要との認識が表れている（表10）。

表10　食事の作法や子供の味覚教育を含めたしつけはするべきか

	Ⅰ群（n=129）	Ⅱ群（n=115）
現代では必要ない	3.9 %	6.1 %
大切なので今日でも必要	94.6	93.9
多くの情報があるので必要性はない	1.6	0

9）スローフード運動について

「多少の関心がある」「興味があるので知りたい」と思っている者はⅠ群で9割以上なのに対して、Ⅱ群では7割程度で、認識に差がみられた（表11）。

表11　スローフード運動が日本でも展開されているが知りたいと思うか

	Ⅰ群（n=129）	Ⅱ群（n=115）
多少の関心はある	70.5 %	60.0 %
興味があるので知りたい	22.5	13.9
興味がないので何でもよい	7.0	25.5
その他	0	0.9

次にスローフードに関する項目のクロス集計を試み、両群の特徴を検索した。

Ⅰ群では「伝統的な野菜などを供給する生産者の育成」と「地域で産した食材を家庭で味わう」が正相関（$p<0.01$）を示し、「自給率が低く、将来の食生活が不安」との間に負相関（$p<0.05$）が認められた。また、「スローフード運動を詳しく知りたい」と「家庭で料理に用いた食材が話題になる」とは負相関（$p<0.05$）であった（表12）。

表12　スローフードに関する相関　スローフードを知っている群（Ⅰ群：n=129）

	伝統的な野菜などを供給する生産者の育成	スローフード運動を詳しく知りたい
ファストフードをよく利用する	-0.195	-0.035
自給率が低く将来の食生活が不安	-0.225 *	-0.033
地域で産した食材を家庭で味わう	0.281 **	0.070
家庭での伝統料理は大切	0.087	0.050
家庭で料理に用いた食材が話題になる	0.016	-0.230 *
食事の作法や子供の味覚教育を含めたしつけ	0.124	-0.050

**：p<0.01　　*：p<0.05

表13　スローフードに関する相関　スローフードを知らない群（Ⅱ群：n=115）

	伝統的な野菜などを供給する生産者の育成	家庭で料理に用いた食材が話題になる	スローフード運動を詳しく知りたい
ファストフードをよく利用する	0.112	0.079	-0.018
自給率が低く将来の食生活が不安	-0.062	0.092	-0.181
地域で産した食材を家庭で味わう	0.251 *	-0.317 **	-0.098
家庭での伝統料理は大切	0.188	0.035	0.282 *
家庭で料理に用いた食材が話題になる	-0.146	1.000	-0.228
食事の作法や子供の味覚教育を含めたしつけ	-0.016	-0.050	-0.065

**：p<0.01　　*：p<0.05

Ⅱ群では「地域で産した食材を家庭で味わう」と「伝統的な野菜などを供給する生産者の育成」が正相関（p<0.05）を示し、Ⅰ群と同様傾向がみられたが、これとは別にⅡ群では「家庭で料理に用いた食材が話題になる」との間で負相関（p<0.01）がみられた。また、「家庭の伝統料理は大切」と「スローフード運動を詳しく知りたい」との間で正相関（p<0.05）が認められ、Ⅰ群とは相反する認識が表れていた（表13）。

考　察

若者に対してのスローフード運動と食生活の関連についての報告は少ない。そこで本報では「スローフード運動を知っている群」と「知らない群」に分けて比較し、スローフード運動の意義について検討した。

日常の食生活を満足に思っているのは3割程度で、7割が不満に思っており、特に「食事のバランスが悪くて不満」に感じている者や「食事時間・内容が乱れがちで不満」という者が多く、現在の食生活がアンバランスで乱れがちであることが推察される（図1）。

毎日の食事では朝食・昼食を簡単に済ます傾向にあり、両群とも同様の結果であったが、夕食についてはスローフード運動を知っている群の方がその割合が10%程少なく（図3）、夕食くらいゆっくり食べたいという気持ちが表明されている。また、コンビニやファストフード店の利用頻度も彦坂ら[6]の成績より多く（図4）、ほぼ毎日利用している者も約3割いた。これは本学が最寄り駅から徒歩1分圏にあり、商店街が近く、コンビニ店やファストフード店も身近であるため、利用者が多いと考えられる。

スローフードに関する項目では、伝統的な野菜やブランド品などを供給する生産者の育成や支援が必要である（表６）と思っている者がＩ群で10％多く、スローフード運動に興味や関心がある者（表11）もこの群に多くみられた。

全体的にみると、スローフード運動を知っている群（Ｉ群）の方が知らない群（Ⅱ群）よりもスローフード思想に肯定的な見解を示す者が多く、スローフード運動に対する受容認識が若干高い傾向がみられ、スローフード運動を推進する必要性が示唆された。

スローフード運動は日本では始まったばかりの活動であるが、わが国では昔から米食を中心とした食生活が定着し、郷土食や地方ごとの食材など独自の食文化を築いてきた[7]。しかし、一方では、流通や販売方法の進展により、食材や料理法などが画一化され、ファストフードやコンビニ店などの味が蔓延し、家庭や地域の特色が薄れつつある。

昨今、国が推進している食生活指針や食育基本法にもあるように、各地域に根ざした伝統的な食材や調理法を生かすとともに、ゆとりのある食文化を形成し、スローフードの思想を後世に伝承していくことが大切ではないかと思われる。

要　約

本学の短大生257名を対象に2005年11月下旬の平日に調査を行い、スローフード運動を知っている者と知らない者（言葉は知っていても内容まで知らない）との２群に分けて比較した。

日常の食生活の満足度、家で作る料理の頻度、毎日の食事、ファストフード店の利用状況などでは両群ともに大きな差は見られなかった。

スローフード思想に関する受容認識は、スローフード運動を知らない群（Ⅱ群）に比べると知っている群（Ｉ群）の方が肯定的な見解を示す者が多く、スローフード運動を推進する必要性が示唆された。

文　献

1）島村菜津：スローフードな人生、9、新潮社（2002）
2）ニッポンスローフード協会編：スローフード宣言、143、木楽舎（2001）
3）金丸弘美：食生活、**99**、（11）、86（2004）
4）ウィリアム・スティール：Vesta、**54**、20（2004）
5）田島眞：食生活、**99**、(9)、52（2004）
6）彦坂令子、北島裕子、八倉巻和子：健康・体力・栄養、**10**、（2）82-87（2005）
7）國本桂史：栄養学雑誌、**61**、(5) 29-30（2003）